里菜と竜兄ちゃん

冬木洋子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
里菜と竜兄ちゃん

【Ｎコード】
Ｎ５０９５Ｓ

【作者名】
冬木洋子

【あらすじ】
年齢差５歳、身長差約４０センチ、ただいま婚約中。変人男とピンボケ娘、ちょっと変な二人の、とっても平凡な幸せ――　◆◆◆◆◆◆◆長編ファンタジー『イルファーラン物語』（完結済）の後日譚に当たりますが、ストーリー的には『イルファーラン物語』とは全く関係ないので、本編未読でも独立した恋愛小説として読めます。◆本編は異世界トリップですが、こちらはファンタジー要素無しの現代恋愛ものです。◆連作短編集です。第一話『エゴノキ平の春』完結済。

エゴノキ平の春（1）

「あした、何着てこう……」
里菜はクローゼットを開けて、中の服を見渡した。
明日はデートなのだ。
いや、デートというのかどうか良くわからないのだが、好きな（ような気がする）男性と会うのだ。
しかも、相手の自宅に招かれているのだ。

（あたしたちって、付き合ってるって言えるのかなあ……）
里菜は今までの、自分とその人との関係……とも言えないような関係を振り返ってみる。
里菜が藤代竜と出合ったのは、数ヶ月前。高校時代の親友、美紀の結婚式でのことだった。彼は、美紀の従兄だったのだ。
いったいなぜ、自分が、あの時、彼との出会いに運命的なものを感じたのか。今でもさっぱりわからない。別に、一見してすごく自分の好みのタイプだったというわけではないのだ。それどころか、どちらかというと、自分の普段の好みの傾向からは明らかにかけ離れていたような気がする。
それなのに、里菜は、彼を一目見た瞬間に、どんな顔をしているかのかさえよく見ないうちから、（探していた人を見つけた……）と思ったのだ。
まったく、世の中には不思議なこともあるものだ。

その後、里菜が彼と会ったのは、たった三回。
一度目は、美紀の新居お披露目のお茶会に呼ばれた時。美紀の計らいで、同じ日に竜が呼ばれていたのだ。
けれど、その日は、結局、竜と里菜との間にはほとんど会話が成立しなかった。美紀が里菜を竜の隣に座らせ、しきりと二人に話を

振ってくれたのだが、なにしろ、竜というのは、極端に無口な男だったのである。話を振られれば相槌は打つが、それで終わり。何を言っても「ああ」とか「いや」としか言ってくれないので、毎回、そこで会話が途切れてしまう。

それでも、帰る前には、美紀の尽力で、いつのまにやら、美紀たち夫婦と里菜、竜の四人で遊園地に遊びにいく約束が出来上がっていた。里菜は心の中で美紀を拝んだ。

その、遊園地での一日が、竜と会った二回目。

美紀たちは、せっせと里菜と竜を距離を縮めるべく尽力してくれたが、とにかく竜が無口だし、里菜は人見知りなので、結局、この日も、竜と特に何か語らったという記憶はなく、楽しい一日ではあったが、竜がどんな人なのかは、やっぱり無口であるということと、遊園地でのデートなどというものがおおよそ似合わない男であるということ以外はろくに分からないままだった。

それでも三回目のチャンスはちゃんと訪れて、二人は、今度こそ初めて一対一でデートをした。

映画を見た後に入ったファミレスで向かい合って押し黙っている時、ふと視線を感じて目を上げると、竜の背後のテーブル席から間仕切りの植木越しにこちらを伺っていた美紀と目が合った。……気になって、こっそりついてきていたらしい。

さすがに今度は、ありがたいとは思いながらも、心の中で美紀を拝む気にはなれず、こっそり顔をしかめてみせると、美紀は謝罪のゼスチャーをしながらそそくさと席を立って店を出て行った。そちらに背を向けて座っていた竜は、そんな一幕には気付かなかったらしい。

もちろん、忍びのお目付け役がいなくなったからといって会話が弾みだすわけでもなく、それからも二人は、思い出したようにぽつりぽつりと話しながら食事をしていたが、里菜がふと、映画にワン

シーンだけちらりと犬が出ていたことを思い出したことから、流れが変わった。里菜が、映画に出ていた犬の話題から竜の飼っているという犬たちのことに話を向けると、それまでろくにしゃべらなかった竜が、急に雄弁に話り出したのだ。無口なわりに、しゃべる気になりさえすれば、別に口下手ではないらしい。

おかげで里菜は、竜本人についてはほとんど何も知らないうちから、竜の飼っている犬たちそれぞれの名前や毛色から性格、体質、クセまで、事細かに知ることになった。

そして、里菜が何気なく言った、

「ワンちゃんたちに会ってみたいなあ」という一言が、更なる道を開いた。

竜は、当たり前のような顔で、何の気負いもためらいもなく、

「じゃあ、今度、うちに遊びに来ないか」と、提案したのだ。

この顛末を後で美紀に電話で報告すると、美紀は絶句した。受話器の向こうでぽかんと口を開けているのが見えるようだった。

あれほど世話を焼いても遅々として進展しなかった二人の仲のあまりの急展開に、あっけにとられたらしい。

それはそうだろう。直前までろくに会話もせず、何の意思表示もせずに美紀をさんざんやきもきさせていた竜が、美紀がちょっと目を離したその直後に、まだまともに話をしたことさえないはずの里菜をいきなり自宅に誘うなどという大胆不敵な速攻業を披露するなんて、誰が想像するだろうか。美紀にしてみれば、まるで、それまで全く動かなかった動物園のナマケモノが、ちょっと目を離した間にすごい速さでありえないほど遠くまで移動していたような気分だろう。

里菜にとっても、これは、想像もつかなかった急展開だった。

でも、竜の家を訪ねることは、里菜には、なんだかとても自然な、あたりまえのことにように思えた。

普通、何度かデートした相手から初めて自宅に招かれる――しか

も一人暮らしの男性宅に――というのは、ちょっと覚悟と決断が必要な、重要な分岐点のような気がする。
　でも、竜はたぶん、ただ普通に、愛犬を見せてくれたいだけのような気がする。それと、言葉であれこれ自分について説明するのは面倒なので、その代わりに、里菜に自分の暮らしぶりを見せて自己紹介に代えたがっているのではないかという気がする。里菜のほうでも、ろくに口を利かないデートを何十回も繰り返すより、一度でも彼の家に行って彼の犬たちと会い、彼の暮らしぶりを実際に見るほうが、よっぽど手っ取り早く効率よく彼への理解を深めることが出来そうな気がする――。

　と、里菜は思ったのだが、美紀は電話の向こうで、ツバを飛ばさんばかりの勢いで、まくし立てた。
「うわー、まさかいきなりそう来るとは思わなかった！　竜兄ちゃん、意外とやるわねぇ。いきなりストレートど真ん中、剛速球！　里菜、あんた、ちゃんと心の準備をしていきなさいよ。覚悟はいいのね？　ほんとにいいのね？」
「……覚悟って、何の覚悟よ」
「また、またぁ。とぼけちゃって、もう！　いくら竜兄ちゃんだって、一応男なんだから、もしかするともしかするかもしれないじゃないのよ。あたしが遊びに行くのとはワケが違うのよ。万が一ってことがあるかもしれないでしょ！　あんた、もしかしちゃってもいいのね？　心はもう決まってるのね？　あの人でいいって、ほんとに決めてるのね？」
「もしかしてもいいかどうかは分かんないけど、心は決めてるよ。この間も言ったでしょ」
「そうよねえ、びっくりよねえ。なんでかなあ。そりゃあ、あたし、あんたと竜兄ちゃんは気が合うんじゃないかと思ったし、うまくいってくれたらいいなと思って引き合わせたわけだけど、まさか、恋愛にあんまり興味ないなんて言って煮え切らなかったあんたが、い

きなりそこまで本気になるなんて思わなかったわよ。でも、あんたがほんとに竜兄ちゃんでいいなら、あたしはいくらでもとことん応援するわよ。がんばって！　だから、とにかく、いざとなっても動転してビンタかまして逃げ帰ったりしなくてすむように、心の準備だけはしていきなさいよ。わかった？」

「そうかなあ……。そういう心の準備はいらないような気がするんだけどなあ……」

「あんた、呑気すぎ！」

そう言って美紀にぴしゃりと叱られた里菜は、けれど今でもやっぱり、美紀が言うような意味での心の準備が必要だとは全く思えない。

里菜は竜と会った瞬間から生涯を共に過ごすのは彼しかいないと心に決めているが、まだ本人にそう告げたわけではないし（そもそも口を利いていないのだから当然だ）、なんとなくデートのようなことはしたが、向こうからはっきり交際を申し込まれたわけでもないから『付き合っている』と言えるのかさえ定かでなく、今まで向こうは常に礼儀正しく距離を置いて、手すら握ったことがないのだ。

そう思いつつ、美紀との会話を思い出すと、ちょっと頬が火照ってきた。きっと赤くなっているだろう。困った。慌てて、美紀の言葉を頭の中から追い払う。

そんなこと、ありえないから大丈夫。自分にそう言い聞かせて、なんとか心を静める。

季節は春。

里菜のクローゼットも春の色だ。といっても、わりと地味好みな里菜のクローゼットの中は、それほどカラフルではないが、パステルカラーの軽やかな春ものニットなどを手に取ると、やはり心が浮き立つ。

ハンガーにかかった衣類を押し分ける里菜の手が、一枚のワンピ

ースのところで止った。
地味な紺色の、子供服みたいな、すとんとしたワンピースで、襟の丸みやくるみボタンなどのちょっとしたディテイルの素朴な愛らしさに心惹かれて数年前に衝動買いしたものだ。
衝動買いをすることなど滅多にない里菜が、普段着ている服とは傾向の違うその服にふと心惹かれて気まぐれに買ってしまったのは、なんとなく、子供の頃にお気に入りだった、母の手作りのよそ行き服を思い出させたからかもしれない。その服の、ちょっとレトロな甘さと垢抜けない子供っぽさが、なんとなく懐かしいような気がしたのだ。
が、珍しく衝動買いはしたものの、結局、里菜は今まで一度もこの服を外に着て出たことがない。もう少し色気と身長があれば『大人のロリ服』という選択肢もありだろうが、顔もスタイルも子供っぽい自分がうっかり子供っぽい服を着ると本当にただの子供に見えてしまうのは、自分でちゃんと分かっているのだ。
身長１４７センチがコンプレックスの里菜は、低い背が少しは高く見えるようにと外出の時はなるべくハイヒールを履いていたのに、この服にはどう考えてもハイヒールは合わないだろうというのも、里菜がこの服を実際に着ることがなかった理由の一つだった。
着ないなら処分してしまおうかとも思ったが、それもためらわれて、結局、この服は、たんすの肥やしになったまま忘れられかけていた。

けれど今、里菜は、なんとなく、竜のところへならこれを着て行ってもいいのではないかと思った。
竜は、里菜がどんな服を着ていようが、全く気にしないのではないだろうか。

今までのデートでは、里菜は一応、それなりに気合を入れて服を選んだ。華美な服装をする趣味はないが、チビで童顔の自分があま

り子供っぽく見えすぎないよう、それなりに気を使ったつもりだった。
選んだ服は悪くなかったと思う。美紀も褒めてくれた。
けれど、竜がその服をどう思ったかは全く分からない。
たぶん、あの人は、女性の服のことになど全く関心がないのではないだろか。
そもそも、女性の服に限らず、自分の服にもあまり関心がなさそうだ。一応、特に見苦しいとかむさ苦しいということはなかったし、背が高く足が長くてスタイルが良いためにそれなりにサマになっていたけれど、そういえば、服装自体はごく無造作で、いかにもどうでも良さそうだったような気がする。
服装だけでなく、今まで知った限りの人柄や言動を考え合わせても、どう考えてもデートの時に相手の服にあれこれ注文をつけるタイプとは思えない。
きっと彼は、もしも里菜が本当の子供服を着ていようと、お母さんのお古の服を着て行こうと、まったく気にとめないに違いない。
それに、どうせ行く先は、美紀の言葉によれば『千葉の山奥』だ。何をしに行くかといえば、犬と遊びに行くのだ。そして、会いに行く相手も、どうせ服のことなど気にしないのだ。

里菜はワンピースを身体に当ててみた。
それから、ふと思い立って、髪を二本の三つ編みに編んでみた。
そういえば、里菜は、子供の頃から高校生頃までずっと髪を三つ編みにしていて、その髪型がお気に入りだったのだ。なんだか懐かしい。
それからもう一度ワンピースを身体に当てて、鏡を見ていた。
鏡の中には、三つ編みにお子様ワンピースの、ちっぽけで子供っぽくて野暮ったい自分がいた。
「ダサっ……」

里菜は思わず小さく吹き出した。ある意味、ハマりすぎ……。似合いすぎ……。まるで、一時代前の小学生みたいな。子供の頃にお祭りの夜店で買ったおもちゃのブローチが似合いそうな……。

でも、なんだか、ほっとする。心が落ち着く。これが本当の自分の姿のような気がする。長いこと、それを忘れていたような気がする。

（そう、本当は、あたしはこういう風なんだ。ほんとはずっと、こういうのが好きだったんだ――）

いつも、少しでも大人っぽく見えるよう気をつけて服を選び、チークやシャドウの入れかたにも気をつかっていた。背を高く見せたくて、いつもハイヒールで背伸びしていたから、脚が疲れた。心も疲れた。

なんでそんなことを気にしていたんだろう。なんで、自分が好きな服じゃなく、他人からどう見えるかに気をつけて選んだ服ばかり着ていたんだろう。他人にどう思われるかなんて、どうでも良かったんだ。自分が好きな服を着れば良かったんだ――。

千葉の山奥で、人から変人扱いされようがお構い無しに心のままに生きている竜のことを思うと、自分も、自由になれる気がした。足に合わないハイヒールで無理して背伸びしているのが馬鹿らしく思えてきた。

そう、明日は、この服を着ていこう。誰がなんと言おうと、自分は、これが好きなんだから。

靴も、ぺたんこのを履いていこう。犬と遊ぶのにハイヒールは向かないだろう。

それに、竜は、正確な身長は知らないが、たぶん自分より４０センチ近く背が高いのだ。並んで立つと、里菜の頭は竜の胸までしか

ない。美紀曰く、笑えるほどのデコボコぶりだそうだ。どうせそこまで差があるのなら、逆に、一生懸命背伸びしてあと数センチばかり上げ底しても、たいして違わないのではないか。いくらなんでも４０センチの差は、ハイヒールくらいでは縮められそうもない。今さら、たった数センチのために足掻いても無駄だろう。だったら、開き直ってしまってもいいのではないか……？

里菜は本当は、ハイヒールは爪先が痛くなるから嫌いなのだ。だから、電車で千葉まで行くのにハイヒールでなくてもいいと思うと、なんだかすごく気が楽になった。ますます明日が楽しみになった。

まるで、遠足の前の日の子供のような気持ち――。

明日、お天気になるといいな。犬や猫といっぱい遊ぶんだ……。

里菜はワンピースをクローゼットに戻しながら、そっと微笑んだ。

エゴノキ平の春（2）

ウグイスが鳴いている。静かだ。のどかだ。時は春。うららかな春の午後。

東京から快速電車で小一時間。駅まで迎えに来てくれた竜の車で、そこからさらに三十分ほど。

県道を逸れ、山というほどもない小高い起伏を一つ越えたその向こうに、まるで隠れ里みたいに、ひっそりと、小さな田んぼがあった。

こういう、谷間の底の田んぼを、この辺では『谷津田』と言うのだそうだ。

その、谷津田のほとり、山との境の一段高くなったあたりに、小さな古い木造家屋があって、そこが、竜と犬たちと猫の住まいだった。

庭は、踏み固められた泥土が剥き出しで、車のドアを開けたら、足元が、ちょうど、ぬかるみだった。

竜が、申し訳無さそうに、ここは谷なので日の当たる時間が短いし山からの水も出るから雨が降ると何日もぬかるむのだ……というようなことをぼそぼそ言い訳しながら、車から降りる里菜に手を貸してくれた。

ハイヒールを履いてこなくて正解だったけれど、ハイヒールを履いていたら、ここで、竜の逞しい腕にもっと縋り付くような状況になっていたかも……と思いかけて、里菜は一人でちょっと赤くなった。

昼食はどこかに食べに行くのかと思ったら、竜が当たり前のような顔で手早く簡単な手料理を作ってくれた。

それから、庭に出て犬たちと遊んで、さらに、犬を連れて竜と一緒に山道を散歩した。
ソメイヨシノはあらかた散ってしまったけれど、谷を囲む雑木山は僅かに咲き残った山桜の色とりどりの若葉に彩られて、微妙な春の色に霞んでいる。木陰の斜面には、空色の蝶々のようなスミレが群れ咲いていた。
まだ田植え前の田んぼの畔にも降りていった。用水路のほとりには、春の陽光を浴びてオオイヌノフグリやタンポポが満開だ。この田んぼには、夏にはホタルも出るのだそうだ。
里菜は本物の野生の（と、言うのだろうか）ホタルを、まだ一度も見たことがない。
「ホタル、見たいな」と言うと、
「それじゃあ、見に来ないか」と、さらりと誘われた。
「でも、ホタルって、夜じゃなきゃ見れないでしょ？　夜遅くなると帰れないから……」と、ためらっていると、こともなげに言われた。
「泊まっていけばいい」
「……え？」
あんまりこともなげに言うので気付くのが一拍遅れたが、もしかして、それって……？
里菜の内心の動揺とその理由に気付いてか、竜は宥めるように言葉を足した。
「部屋は空きがあるから大丈夫だ。でも、鍵はないから、もし君が不安だったら、寝るときは襖につっかい棒をして寝ればいい」
そう言った竜は、大真面目だった。冗談のつもりではなさそうだ。
「つ、つっかい棒……。あるんですか？」
「いや。でも、もし君が泊りに来るなら、調達しておく」
また、大真面目に言い切った。
本気だ、この人。本気でつっかい棒を調達するつもりらしい。……やっぱり、この人、ちょっと変わってる……。

そうして、今、山を背にした古い木造家屋の縁側の端っこに、竜と座布団を並べて腰掛けて、ウグイスの声を聞きながら、陽だまりでお茶を飲んでいるのだ。膝の上には、猫が丸くなっているのだ。二人の間には、竜の愛犬ミュシカが長々と身体を伸ばしてのんべんだらりと寝そべっているのだ。

この、妙に和む、妙に落ち着くシチュエーションは何なの……？

これがデート……？　昔話の中のおじいさんとおばあさんになったような気分なんですけど……。

でも、こういうのって、いいかも……。

里菜は隣に座る竜をちらっと見た。

東京で会った竜はいつもどこか窮屈そうだったが、ここでは妙にくつろいで、自分のテリトリーにいる自信と落ち着きに溢れているような気がする。東京にいた時は、竜がぎこちないので、その場に馴染んでいる自分のほうが何となく少し優位に立っているような気がしていたのに、ここでは、むしろ逆だ。テリトリーに連れ込まれた自分が負けみたいで、なんだかちょっと悔しい。

ゆったりと構えつつ、なおかつ力を秘めて隙を見せない大きな身体は、木陰で寝そべる虎のようだ。その気になればいつでも瞬時に獲物に飛び掛れるが、今はお腹が空いていない……とでもいう余裕の風情。

それにしても大きい人だ。ウドの大木とはこのことか。なんだか不公平だ。神様はこの人にこんな無駄な身長をあげるくらいなら、そのうちたった5センチ分でもいいから、あたしの方に回してくれればよかったのに……。

ぼんやりとそんなことを考えていたら、竜が唐突に言った。

「前に会った時と、髪型や服の感じが違うので驚いた」

そんなことを言われて、里菜のほうも驚いた。てっきり、この人は服や髪形なんか見てないだろうと思ってたのに……。
今日の里菜は、例のワンピースの上に、控えめな小花のモチーフのついた丸首の春物カーディガンを羽織り、髪は三つ編みだ。
竜がちゃんと見ているならもっと気合入れてくるべきだったのかも……と、里菜は少し後悔した。
なにしろ、本命も本命、生涯の伴侶と心に決めた相手との重大なターニングポイントだというのに、ろくにメークさえしてこなかったのだ。こういう場合は、ほとんど素顔に見えるけれど実は時間のかかった、丁寧な気合いメークをしてくるべきだったはず……。女の子としては、相手が外見に気を使わなさそうな人だからといって、自分まで手を抜いていいということはない。ここ一番の勝負どころにあるまじきことだ。
なのに、お子様ワンピースを着て髪を三つ編みにしたら、ふと気が抜けてしまって、なんだかどうでもよくなってしまったのだ。
自分の格好が急に恥ずかしくなって、気弱に呟いた。
「もしかして、ヘンですか？　ちょっと子供っぽいかなとは思ったんだけど……」
すると、思いがけずはっきりと、強い口調で返された。
「いや。とても似合っていると思う」
「えっ？」
里菜はまたまた驚いた。
この人がそんなことを言うとは思わなかった。服なんか見てないし、もし見てても、褒めたりしない人だろうと思ってた――。
竜は、自分でも自分の発言に驚いた様子で、口ごもりながら言い訳した。
「その……、このほうが君らしいと思ったんだ」
これもまた意外な言葉だった。なんで、そんなことを言うんだろう――？
最初にこの人と会った時はレンタルのパーティードレスを着てい

た。その後、数回会った時も、毎回、それなりにおしゃれしていたし、服の傾向も違っていたはずだ。それなのに、この人は、自分の、どこを見てそう思ったんだろう――。

思わず、訊ねていた。

「……どうして？　どうしてあたしらしいと思ったんですか？　高校の頃は三つ編みにしてたんだけど、美紀にその話、聞いたんですか？」

「いや。でも、さっき、君が、その姿で駅に降りてきたのを見たとき、君がそういう青っぽい色の素朴なワンピースを着て髪を三つ編みにして野原に立っているのを、昔、見たことがあるような気がした。自分でも、なぜそう思ったのか分からない。すまない」

「『すまない』って……。別に謝ることないですけど……」

「いや、君の事を何も知らないのに決め付けるようなことを言って……」

大真面目に言って、ふいと横を向いた。照れているらしい。

「いいえ。あたしも、このほうが自分らしい気がしたんです」

そのまま、また会話が途絶え、ふたりとも、しばらく黙っていた。けれど、その沈黙は、決して気詰まりなものではなく、穏やかな、心地よい沈黙だった。

里菜の膝の上で、猫が大あくびをした。

眼下には箱庭みたいな田んぼ、ぐるりは新緑の雑木山。庭には八重桜。はらはらと降る、薄紅色の花びら。ぽかぽか麗かな春の陽射し。時が止まったかのような、小さな、穏やかな別世界。

里菜は思わず、呟いた。

「ここ、いいところですね……。あたしも、こういうところに住んでみたいなあ」

別に返事を期待したわけでもない、独り言のような呟きに、思いがけなく即答された。

「なら、住まないか？」

「え？」
「ここに、住まないか？　俺と一緒に、この家に。つまり、その……、突然で驚くとは思うんだが、もしよかったら、俺と結婚してくれないだろうか」
「……は？」
里菜は絶句した。
驚いた。もちろん驚いた。当たり前だ。確かに、あまりにも突然だ。
美紀が想像したようにいきなり押し倒されたり強引に迫られたりするような事態はまずありえないと思っていたが――実際、そんなことになりそうな気配は全く無かったのだが――、それどころの話ではなかった。そこまでは、まあ、ありえないとは思うものの、それなりに予測可能な事態だったけれど、これは、それ以上にありえないほど飛躍した、想像を超える急展開だ。
落ち着け、自分……。いくらなんでも、これはありえない。きっと冗談だ。四月一日はとっくに過ぎているけれど、この人、世間一般とちょっとズレてるみたいだから、この人の中では今日がエイプリルフールなのかもしれない……。
そう思って、思わず聞き返した。
「あの……、冗談ですか？」
「まさか。本気だ」
その表情はあくまで真剣で、眼差しは、静かながらも、たじろぐほど熱い。

エゴノキ平の春（3）

「で、でも……」

里菜は呆然とした。たしかに、自分もこの人と一生を共に過ごしたいと思っていたのだ。だから、ただ一言、はい、と、応えればいいのだ。この人とはじめて出会って以来、美紀にも後押ししてもらってガラにも無く頑張ってきたのは、この人の口からこの言葉を聞くためだったはず――。

……とは、思いつつ、さすがにこれは、あまりに急で、言葉が出ない。いくらなんでも、こんなに簡単にプロポーズしたり、それをすぐにＯＫしてしまったりしていいものだろうか――。

竜は、戸惑う里菜を労るように、穏やかに言った。

「驚かせてすまない。嫌だろうか。嫌だったら、断ってくれていい。俺は、結婚するなら相手は君しかいないと思っているんだが、それは俺の勝手な願望であって、君に無理強いするわけにはいかないから」

「えっ、嫌とかそういうことじゃなくて……。だって、あたしたち、まだ、今日を入れて五回しか会ったことがないんですよ！？　美紀の結婚式の時と、美紀んちに呼ばれた時と、遊園地行った時と、映画見たときと、今日と。しかも、美紀の結婚式の時なんか、はじめましてって挨拶しただけで、それっきりだったし、美紀んちや遊園地でもほとんど口きいてないし、だからお互いのこと、まだほとんど何も知らなくないですか？」

指を折って数えつつ懸命に言い募る里菜に、竜は淡々と答えた。

「確かに知らないといえば知らないが、俺は、自分が、君と共に暮らし、共に生きたいと感じていることは、はっきりと知っている。俺はそれで十分だ。それさえ分かっていれば、俺にとっては、他のことは、それほど重要じゃない。あと、他に重要なのは、君の意思

だけだ」
「えーっ、だって、だって……。だって、そんな……。二人だけで会ったのはこれがまだ二回目で、まだ、手を握ったこともないのに」
「手を握ったことがないと結婚を申し込んではいけないのか？」
「……へ？」
「じゃあ、今、手を握ってもいいだろうか？」
あくまで真剣な声音に押されて、思わず答えてしまった。
「いっ……？　……いいです、けど……」

竜が、間に横たわるミュシカ越しに突然ぐっと身を乗り出して、猫の背中に置かれていた里菜の両手を取上げ、両手でがっしりと握った。
力強い握手ではあるが、なんだか、恋人の手を握る握り方ではないような気がする……。いや、恋人同士でどうやって手を握り合うかなんて、今まで特にあらためて考えたこともないけれど……。
（でも、これは違うと思う。どっちかっていうと、政治家とか外国の実業家とかのする、ビジネス握手？）

大きな力強い掌から、熱の篭った眼差しから、熱意と誠意と力強さと頼もしさは、ひしひしと伝わってくる。
とても誠実で、頼り甲斐がありそうだ。
どこの社長だって、ふらふらっと、『この人の会社となら提携しても大丈夫かも』と思ってしまいそうな……。
でも、里菜はあいにくと、どこの社長でもなかった。

そんなことを考えながらも、両手を竜の手の中にしっかりと包み込まれ、その温もりを感じ、熱く真剣な眼差しに囚われて、やっぱり、ドキドキしてくる。
手を握るなんて、特に意識するまでも無い、なんでもないことのはずなのに、あまりにも状況が不自然で、ぎこちないので、かえっ

て妙に意識してしまう。
どうしよう。なんかクラクラする……。赤くなっちゃってるかも……。

そのまま、しばらく、二人の間に間抜けな沈黙が流れた。
ややあって、竜はそっと里菜の手を解放した。急に温もりが離れた手が冷たいに空気に晒されて、なんだか寂しい気持ちになった。それまで別に手が冷たいとは思わなかったのに、いったん、あんなぬくもりを知った後では、なんだかすごく寒くなった気がする。
竜はあくまで真剣に言った。
「これで、結婚を申し込む資格が出来ただろうか」
ヘンよ、ヘン、この人、やっぱりちょっとヘン……。
そう思いながらも、つい釣り込まれて、あいまいに頷いてしまった。
「ええ、はい、まあ……」
「じゃあ、あらためて、結婚を申し込みたい。とはいえ、突然言われても、返事に困るのは当然だと思う。即答してくれとは言わない。が、とりあえず、検討してくれる余地はあるのだろうか？　俺は、ご覧のとおりのちょっと特殊な生活をしているし、収入も不安定だし、学歴は大学中退だし、親からは縁を切られたに近い状態だしで、普通一般の基準で言えばあまり条件が良いとは思えないので、その段階で君としては既に門前払いだといわれてしまえば、もう、しかたがないのだが」
「そ、そんなことはないですけど。収入なんて二人で働けばなんとかなるだろうし、竜さんがどこの大学出たか出ないかなんてあたしにはぜんぜん関係ないことだし……。でも、でも、あたし、まだ竜さんのこと、何も知らないし……」
「だったら、なんでも質問してくれ。どんな難しい質問でも、答え難い質問でも、誠心誠意考えて、出来る限り正直に答えるから」
大真面目にそんなことを言われて、里菜の頭の中でもう一人の里

菜が喚いている。
（変人よっ、変人だわ……！）
そう思いつつ、つい、事態も忘れて好奇心が涌いてしまった。
「ほんとですか？　ほんとに何でも正直に答えてくれるの？」
「ああ。自分でも、いくら考えてもどうしても答えが分からないと思ったことは『分からない』と答えるかもしれないが、それは、それが一番正直な答えだと理解してくれ」
誠実そのものの、まっすぐな眼差し。
ほんとかな。ほんとに、どんな質問でも答えてくれるのだろうか。
それじゃあ、試しに、何か、とても難しい、答えにくいことを聞いてみようか。難しいことってなんだろう。例えば、何かすごく口に出し難いような、恥ずかしい質問でも、本当にちゃんと答えてくれるんだろうか。

そういえば、ちょっと知りたいと思っていたこと、聞いてみたいことはある。美紀はこの人が『年齢イコール彼女いない歴』だろうって言ってたけど、それは本当なのかとか。もし付き合った人はいないにしても、今まで、好きになった女の子はいたのかとか……。
でも、こんな真摯な眼差しで何でも聞いてくれと言われてみると、かえって、自分が本当にそれをそんなに知りたいのか、分からなくなってくる。
別に、彼が昔、他の女の子と付き合ったことがあったとしても、誰かを好きだったことがあっとしても、だからどうだというのだ。別に関係ないじゃないか。自分だって他の男の人と付き合っていた。
本当に知りたいのは、そんなことじゃないはず……。

後で思えば、縁談を検討する際に確認すべき情報といえば、相手の年収とか、親との同居予定の有無とか、婿入りの可否とか、すき焼きにごぼうを入れるか入れないかとか（このあいだ、美紀の家に遊びに行って夕食をごちそうしてもらうことになった時、美紀と旦

那がすき焼きの具を巡って壮絶な大バトルを始めて身の置き所のない思いをしたばかりだ）、そういうことなのかもしれないが、そのときはそんなことは全く思いつかなかった。
思いついたとしても、訊きはしなかっただろう。
里菜が知りたいのは、お金だの親だのすき焼きだののことではなく、もっと、竜本人に関することだ。

（この人について、知りたいこと……。何か難しい、答え難い、恥ずかしい質問……）
もはや結婚の申込みとは何の関係もない、単なる好奇心と探究心だけが頭の中をぐるぐる回る。
これは、あまりの急展開に心がついてゆけなくなっての、一種の現実逃避かもしれない。
目が回るほどぐるぐるぐるぐると不毛な思考をめぐらせた挙句、突然思いついた、一番答えにくそうな質問を、里菜は思わず口に出してしまった。
「えっと、じゃあ、じゃあ、竜さんは、一日に何回、おならをしますか！？」

口に出してしまってから、自分でもあぜんとして激しい後悔に襲われた。
なんであたし、こんなこと聞いちゃったんだろう……。別にそんなことが知りたいわけじゃないのに。ただ、どんなに答えづらい質問にでも本当に正直に答えてくれるか、どんな恥ずかしいことでもちゃんと教えてくれるかを試してみたかっただけで……。だからって、こんなヘンなこと聞くなんて。ああ、恥ずかしい。消えてしまいたい。
竜は、一瞬、豆鉄砲をくらったような顔をした。それから、深刻な顔で空中を見つめて黙り込んだ。大真面目に考え込んでいるらし

い。
（こんな質問をされて真面目に考え込んでいるなんて、この人、やっぱり、ヘンよ、ヘン……。こんなことを聞いちゃったあたしのほうがもっとヘンだけど……）
里菜の思考は、また、ぐるぐると空回りしはじめる。

しばらく考えた後、竜は大真面目に答えた。
「……日によって違うと思う。今までそんなことは気にしたことが無く、回数を数えたことも無いので、よくは分からないが。でも、もしもそれが君にとって是非とも知る必要がある重要な事柄であるのなら、これからしばらく気をつけて数えて、平均を出してみるが？」
（ヘンよ、ヘン！　やっぱり、この人、絶対ヘン！　あたしよりヘン！）
頭の中でもう一人の自分が喚きたてているのを聞きながら、里菜は答える。
「いえ、いいです、数えなくて……。ごめんなさい、変なこと聞いちゃって。ほんとはそんなこと聞きたかったわけじゃないんです。ただ、何を聞いていいか分からなくて、とっさに言っちゃっただけなんです」
「なら、よかった。分からなくて申し訳ないと思った。他には、なにが聞きたい？」
これ以上何も聞かなくても、この人が本当に変人だということだけは、よくよく分かった。
でも、最初にいきなりとんでもないことを聞いてしまったおかげで、どんな質問もこれに比べたらまともだと思えて、質問がしやすくなった気がする。
ふいに、すんなりと、本当に知りたかった言葉が出てきた。
「何であたしと結婚したいって思うんですか？　あたしが竜さんのことをまだ良く知らないだけじゃなく、竜さんもあたしのこと、ま

だ全然知らないのに。竜さんは、なんであたしがいいの？　あたしの、どこがいいの？　あたし、竜さんが思ってるような人じゃないかもしれませんよ？　もしかして、竜さん、あたしがおとなしそうだから扱いやすそうだとか都合が良さそうだとか、思ってません？」
「そんなことは思っていない」
「なら、いいけど。あたし、よく、そういう風に見られるらしいんです。それ、はっきり言って、大勘違いなのに。あたし、けっこういろいろと、見かけによりませんよ？」
「ああ、分かっている……と思う。まだ知り合ったばかりでそんなことを言うのもおこがましいとは思うが、少なくとも、君の事を、おとなしいから御しやすいだろうなどと思っているわけじゃない」
「じゃあ、どう思ってるの？」
「『どう』と言われても……」
「あたしのこと、好きなんですか？」
「ああ、たぶん」
「……たぶん、ですか？」
里菜の声に含まれる危険な兆候に、竜は気付いたのかどうか。あっさと答えた。
「ああ、すまない」
「『すまない』って……。なに、それ！　好きかどうか分からないのに、結婚したいなんて言わないで下さい！　あたし、帰る！」

里菜はいきなり立ちあがった。膝から転がり落ちた猫が不服そうな声を上げる。靴は履いたままだったから、そのまま庭に飛び出した。『帰る』と言ったって竜に車を出してもらわなければ帰れないのだが、そんなことは頭に無かった。とにかく憤然と歩き出したら、数歩もいかないうちに、いきなりぬかるみで足を滑らせた。
（転ぶ！）と、思った瞬間、背後から力強い腕に抱きとめられた。そのまま、無言で、厚い胸に抱き取られる。
どうしよう、どうしよう……。

ぬかるみで足を滑らせかけるという間抜けなハプニングのおかげで、里菜は一気に我に返っていた。竜への怒りはもう消えて、自分の衝動的な振る舞いが恥ずかしかった。いや、もともと、怒ったわけではないような気もする。考えてみれば、自分だって、一生を共に過ごす相手は竜しかいないと思いこんでいるものの、竜が好きなのかどうか、そういえばよく分からない。はっきりと好きだと言い切るには、まだ相手のことを知らなすぎ、自分の気持ちも把握しきれていない。きっと、竜も同じような気持ちなのだ。そんな状態で、安易に好きだと言えるほど、彼にとって、『好き』という言葉は軽くないのだろう。きっぱりと断言しないことこそが、彼の誠実さなのに違いない。自分の感情をとても深く掘り下げて真剣に分析検討してくれたからこその、あの答えだったのだ。竜に謝らないといけない。支えてくれたお礼も言わなければ。

……と、思いつつ、竜に背後からしっかりと抱きすくめられているこの状況は、何なのだ。

竜の腕が、圧迫感拘束感を抱かせるほど強くなく、かといって簡単に振り払えそうなほど弱くもない絶妙の力加減で巧みに里菜を押さえ込んでいる。大きな身体が背後からのしかかっている。そんなに強く押さえつけられているわけではないはずなのに、どういうわけか、身動きが出来ない。

何、これ？　もしかして、何か、謎の武術の技？

エゴノキ平の春（完）

前に美紀が、竜のことを、「『思うところあって世を捨てて山に篭った孤高の天才格闘家』みたいな雰囲気がある」と言っていた。あと、夜中に一人で腕立て伏せとかしてるんじゃないか、とか。

確かに、この人には、そういう雰囲気があるかもしれない。穏やかに見えるけど実は奥義を極めた武術の達人、みたいな。

それにこの、『何これ？』ってくらい硬くて太い腕とか、ウルトラマンみたいな胸とか、さっき料理をしている時に垣間見せた最小限の動きで最大限の効率を上げる異様に無駄のない身のこなしとか、いきなり飛び出した自分の後ろにこうしていつのまにかぴったり付けていて転びそうになったらすかさず抱きとめてくれるこの運動神経とか反射神経とか的確な読みとか……、今までそういう方面はてんで関心が無かったから良く分からないんだけど、あらためて考えてみたら、やっぱり、ただものじゃないのかも？

美紀は、こうも言っていたっけ。

『遊びに行ったとき、庭の木に板っぱがぶら下げてあるのを見たけど、もしかすると竜兄ちゃん、毎日あれに飛び蹴りとか入れて修業してたりして。アチョーとかトリャーとかアタタタターとか言って。で、毎日ちょっとずつ、板を高くしてたりして』と。

そういえば本当に、庭の木の枝に、板切れ、ぶら下がってたし……。

あたし、謎の格闘技の技をかけられてるのね？　でも、なんでそんなことに？

……そんなわけ、ないか。

じゃあ、どうして動けないの？　あたし、どうしちゃったの？

竜はとても大きいから、里菜はすっぽりとその広い胸に抱え込ま

れてしまって、その体温に包まれる。温かい。心臓の鼓動が交じり合う。
何も言わない竜は、何を考えているのだろう。どういうつもりだろう。これから、どう動くんだろう――。
ちょっと不安になりかけたところで、頭上から、静かな穏やかな低い声が、優しく降ってきた。
「……いい子だ。グッボーイ……」

とたんに里菜はぷっと吹き出した。
さっき、竜は、こうやって、犬を背後から抱きしめて、こんなことを囁いていたっけ。
いつも犬ばかり相手にしているから、人間相手でも、ついうっかり、日ごろのクセが出てしまったらしい……。犬の相手には慣れているが人間の女の子には全く慣れていないのがばればれだ。
そう思ったら、一挙に力が抜けた。気がついたら、身体が動くようになっていた。
「やだ、竜さん、犬じゃないんだから……」
里菜は笑いながら竜の腕をすり抜けた。
「いや、つい、クセで……。落ち着かせようと思っただけなんだ。すまない。……ところで、その、帰るといっても、今すぐだと、電車が無いんだが。この時間は本数が少ないんだ。もしよかったら、もう少し、いてくれないか。その次の電車に間に合うように駅に送るから」
「ううん、まだ大丈夫。ごめんなさい、急に帰るなんて言って。次の電車じゃなくても、駅まで送ってくれるなら、もっと後でも大丈夫だから」
「それなら良かった。……俺は君を怒らせてしまっただろうか」
「ううん」
「そうか、良かった。じゃあ、戻ろう。足元に気をつけて」
ごく自然に里菜に手を貸して縁側に連れ戻しながら、竜は話し始

めた。
「よかったら、さっきの話の続きを聞いてくれないか。その前に、他に何か俺に質問はあるだろうか」
……まだ質疑応答の時間は終わっていなかったらしい。
そうだ、ちょうどいいから例の板切れと謎の武術について聞いてみよう。
里菜は、竜と並んで――今度はミュシカを間に挟まずに――縁側に座り直しながら聞いた。
「じゃあ……。えっと、竜さんは、何か格闘技とか謎の中国拳法とか、やってるんですか？」
「え？」
竜はぽかんと口を半開きにした。
「……いや、別に、やっていないが……。君は格闘技が好きなのか？」
「い、いえ、別に……。ただ、すごい体格良いし、美紀が、何か密かに修行してるんじゃないかって言ってたから……」
「何でまた、そんなことを……」
「だって、似合ってるからって。なんだぁ、ガセだったんだ。じゃあ、夜中に腕立て伏せしてるっていうのもガセ？」
「……それも美紀が言っていたのか？」
「うん。何か運動してなきゃあの筋肉維持できないだろうって。で、夜なんか　一人暮らしでテレビも無くて、やることないだろうから、一人で黙々と腕立て伏せとか腹筋とかしてるんじゃないかって」
竜は苦笑した。
「まあ、腕立て伏せは、しないこともない。別に夜中とは限らないが。確かに、動かしていないと身体はなまる。でも、別に、夜にすることがないわけじゃない。テレビは無くても本や新聞は読むし、帳簿付けもする」
「へー、ちゃんと帳簿付けてるんだ。偉いんですね！　自営業ですもんね。でも、じゃあ、あの、修行をしていないんなら、あそこの

木の枝にぶらさがってる板はなんですか？」
竜はまた、きょとんとした。
「……板？」
「ほら、あれ」と、板を指差すと、
「ああ……」と納得顔になった。
「あれは、昔、猿を飼っていた時の、猿の遊具だ。その猿はもう死んだが、あの板は、何となくそのままにしてあった」
「なんだぁ。美紀がね、竜さんは毎日あの板に跳び蹴りとか入れて、板を少しづつ高くしたりして修行してるんじゃないかって言ってたんです」
「まさか」
竜は笑った。
何か、少し会話が成立しはじめたかもしれない。いい雰囲気になってきた――。そう思って、里菜は嬉しくなった。
それじゃあ、せっかくだから、やっぱり『彼女いない歴三十二年』疑惑についても、ついでに訊ねてみよう。どうでもいいことだと思いはしたけれど、やっぱり気になっているらしい。嫉妬ではなく、単なる好奇心――というか、怖いもの見たさだ。いったい、三十二にもなるまで一度も女性と付き合ったことが無いなんて、本当にそんな事があり得るものだろうか。
「もう一つ、いいですか？　竜さんは今まで女の人と付き合ったこと、ありますか？」
「いや。一度もない」
「えっ、ほんとにそうなんだ……。どうして？」
「どうしてといわれても……。別に誰とも付き合いたいと思わなかったから」
「どうして？　どうして思わなかったんですか？　好きになった女の子もいないの？」
「ああ、いない」
「一人も？　一度も？」

「ああ。今回が初めてだと思う」
「……それって、あたしのことですか？」
「ああ」
竜は照れくさそうに目をそらした。一応、さっきの答えで里菜を怒らせてしまったことを反省しているらしい。
それから、前を向いてぼそぼそとしゃべりはじめた。
「美紀から聞いているかもしれないが、うちの両親は、俺が子供の頃に、母の不貞が元で離婚しているんだ。母は俺が十歳の時に突然家を飛び出して行き、それ以来、俺は一度も母と会っていない。まあ、そんなことはこっちの勝手な事情で、他人には関係ないことだし、あまり他人に言いふらすような事柄でもないんだが、結婚を申し込む相手には、話しておくべきだろう。ここだけの話として聞いておいてくれ。
当時、俺はまだ子供だったから知らなかったが、どうやら、父と母の間は、上手くいっていなかったらしい。今にして思えば、父は、たぶん、父なりに母を愛していたと思う。でも、それは、母には伝わらなかったんじゃないかと思う。
父は、悪い人ではないが、寡黙で謹厳な人で、自分に厳しく高潔な一方で、家族に対しては大変強権的で支配的な人だった。外ではたぶん立派な人だと思われているだろうし、確かに立派な人ではあるのかもしれないし、患者からは親切で篤実な医者として慕われていたらしいし、べつだん、特に母を虐げていたというようなことは無かったと思うんだが、ただ、本当には母を理解しようとしていなかったんじゃないだろうか。
一方、母は、今にして思えば、たぶん、精神的に少々未熟な、弱い人だったんだと思う。そして、父は、自分が強くて立派な人間すぎて、自分のように立派な人間になれない弱い人間というものを、理解できなかったんだと思う。父の強さが母を押しつぶした。――父はたぶん、いまだにそのことに気付いていないと思うが。そして、母は父を憎んだ。父と似ている俺も疎んだ。

――俺は、母を不幸にした父に、よく似ているんだ。顔だけじゃなく、たぶん性格も。その、俺とよく似た父が、母を傷つけた。だから俺は、自分が誰かを愛した時、父のように愛する人を傷つけてしまうのではないかと、さらには、その挙句、愛した人に裏切られてしまうのではないかと、恐れていたんだと思う。父が母を不幸にしたこと、母が父を裏切ったこと、自分が母に捨てられたことがずっと心にひっかかっていて、俺は、自分が誰かを好きになってその人を幸せに出来るという将来をイメージ出来ずにいたらしい。それで、自分でも気付かないうちに、ずっと、女性や恋愛を避けてきたんだと思う。自分でそのことを自覚したのはだいぶ後になってからで、ある時期まで自分でもそのことに気付いていなかったんだが」

里菜は、我慢できずに口を挟んだ。

「竜さんは、人を傷つけるような人じゃないわ！　ちょっと変わってるけど、優しいし、誰がどう見てもいい人よ」

お世辞ではなく、本心から、真心を込めた言葉だった。竜のことはまだよく知らないが、これだけはもう分かっていると思う。

けれど、竜は、真顔で言い返した。

「だが、誰かを本当に愛してしまったら、その相手に対しては、そんなにいい人ではないかもしれない。それが、怖かったんだ。通り一遍の相手になら、いくらでもいい人でいられるさ。父が、家の外では誰からもいい人だと思われていたように。

……父が母を愛していなかったというのなら、まだ、いいんだ。たぶん、父は母をとても愛していて、それなのに、父が母を愛すれば愛するほど母は息が詰まっていったんじゃないかと、容易に想像できてしまったのが辛かった。

自分の親のことをこんな風に言うのは何だが、あの人の、人の愛し方というのは多分に独善的なので、たぶん、俺に対してずっとそうだったのと同じように、母のことも、完全に自分の支配下に置き、常に自分の意に叶うような存在でいさせようとしたんじゃないかと

思う。しかも、自分でそれに気がついておらず、俺に対して理解ある父親でいるつもりだったのと同じように、母に対しても寛大な夫でいるつもりで、実際、傍目にはそのように振舞いながらも、いつのまにか母をがんじがらめにしてしまっていたんだろう。

たぶん、あの人には、自分の愛するものが自分の一部ではなく自分とは別の存在であると言うことが、よく分かっていないんだ。だから、母に去られたことは、ものすごいショックだったろうと思うし、たぶん、今でもまだ、そのショックからあまり立ち直っていないんじゃないだろうか。ある意味、可哀想だとは思う。

だから、俺は、父に似ている自分も、そんなふうにしか人を愛することが出来ないのではないかと、そして、あんなふうに愛する人を不幸にし、自分も不幸になるのではないかと、恐れていたんだ。……ああ、なんだか、家族の愚痴のようになってしまって、すまない」

「いえ……」

里菜は何と答えていいか分からなくて、あいまいに相槌を打った。

今まで無口だとばかり思っていた人の突然の長広舌にも驚いたが、いきなりこんな踏み込んだことを聞かされるとは、まさか思わなかった。まるで何かの分析結果でも発表するような淡々とした口調なのだが、実はものすごく重い内容ではないか。

竜は、また、淡々と続けた。

「話は戻るが、その後、俺は、自分が女性や恋愛を避けてきた理由に気付き、自分が父の影に囚われていたことに気付き、そこから抜け出したつもりだ。その過程で、それまでの反動として今思えば必要以上に父に反発し、溝を作ってしまったが、それは俺が父の支配下から離れるために避けられない過程だったのだと思うし、その溝は、今後、おいおい埋めていけると思っている。母についても、ずっと心の中で引きずっていたらしいが、今ではそれなりに心の整理

がついているつもりだ。
が、自分が女性や恋愛を避けていた理由に気付いたからといって、すぐにぜひとも恋愛や結婚をしたくなったわけでもなく、また、それからも、たまたま、特に好きになれる人とめぐり合うことはなく、他に、親だの進路だの生活だの、考えるべきことやするべきことはいろいろあったから、恋愛について特に考えることもないままに、気がついたら、この歳になっていた。なんとなく、どうやら自分は女性にそれほど興味がないらしいとも思っていた。
でも、君に初めて会った時、そうじゃなかったんだと、分かった。今まで俺がどの女性にも特に興味を抱けなかったのは、女性に興味が無いからではなく、その人たちが君じゃなかったからなんだと。君を見て、ああ、この人だ、この人が自分が巡り会うべき人だったんだ、と、そう思ったんだ。やっと見つけた、やっと巡り会えた、と。
どうしてそう思ったかは分からないが、それからずっと、毎日、君の事を考えていた。君と、もう一度会いたい、そして、ずっと一緒にいたいと。そして、なぜか、突然、父には家族を幸せに出来なかったが俺には出来るかもしれないと思ったんだ。少なくとも、そうするように努力することは出来るはずだと。
いくら父と似ていても、俺は俺だ。父とは違う。父と母の問題は父と母の問題であり、俺は俺で、自分の人生を生きられるはずだ。俺にも、人を愛することが出来るはずだ。愛した人を大切にし、幸せにすることが出来るはずだ。少なくとも、そうしようと努力することは出来るはずだ。そして、そうする相手は、君がいい。どうしてだか説明は出来ないが、絶対に、君でなければだめなんだ。
それが、さっきの質問の答えかもしれない。なぜ君がいいのか、という。
なぜ君がいいのかは、俺が、君に関してなら、そういう風に思えるからだ。なぜそう思うのか、その理由は分からないから、君のどこがいいのかと言われても答えられなかったんだが。

大変申し訳ないんだが、もしかすると、これは、君自身の個性や性質とは、あまり関係ないのかもしれない。ひたすら、俺の側の問題だ。俺が、なぜだか、君とならずっと一緒にいたいと思える、君を得るためにならどんな努力をしてもいいと思える、それだけが理由だから。本当に自分勝手で申し訳ない。ただ、とにかく俺は、君がいいんだ。まあ、それはこっちの勝手な思い込みなので、君に押し付けることは出来ないが……。」

里菜はあっけにとられながら竜の言葉を聞いていた。

淡々と話しているのに、そのわりに、言っている内容は、なんだかぽかんとするほど熱烈なような気がする……。これが、好きかと問われて『たぶん』と答えた男の言う事だろうか？

しかも、この人、自分の言ってることがものすごく熱い口説き文句だということに、自分で全然気がついていないっぽい……。気付いていたら、こんな風に照れもせずに言える人ではないだろう。

「……それって、『好き』ってことじゃないんですか？」

恐る恐る言ってみたら、竜は愕然としたように呟いた。

「そうか、そうなのか……。そういえば、そうなのかもしれない」

大きな、逞しい竜が、なんだか途方にくれたような顔をするのを見たら、どういうものか、ちょっと勇気が沸いてきて、里菜はくすりと笑って駄目押しした。

「むしろ、一目惚れっていうんじゃないかと」

竜は目を宙に泳がせた。

「あー。なるほど。……言われて見れば、そうとも言うかもしれない」

「竜さんって、変わってますね」

「ああ、どうも、そうらしい。自分では、どこがどう変わっているのか、良く分からないんだが」

あまり真面目に答えるので、里菜はまた吹き出した。

竜は小さく咳払いをして、いきなり話を締めくくった。
「というわけで、長々とすまなかった。こんなことを人に話すのは初めてだ。その……家の事情とか、今まで恋愛をしなかった理由とか」
「ありがとう。いろいろ話してくれて。……でも、やっぱり、今はまだ、返事は出来ません」
「もちろん、今すぐにとは言わない。ただ、考えてくれればいい。君が返事をする気になるまで、いつまででも待っている」
竜は静かに答えた。真摯な眼差しに、胸が熱くなった。
心はとっくに、最初から決まっている。初めて会ったときから。
でも、『はい』と返事をする前に、やっと巡り会えたこの時を、もう少し、大切に過ごしたい。もっと、ゆっくりと、知り合ってゆきたい。ちょっと変わったこの人のことを、少しづつ理解してゆきたい。生真面目で優しいこの人に、少しづつ、恋をしてゆきたい――。
あせらなくても大丈夫。この人は、きっと、待っていてくれる。
「ありがとう。きっと『はい』って返事をするから、もう少し、待ってて。もっと、何度も会って、いろんな話をして、一緒にどこかに出かけたりして、お互いによく知り合ってからＯＫって言いたいんです」
「わかった。じゃあ、これから、何度も会おう。いろいろ話そう。一緒にどこかに行こう」
竜の優しい微笑みに、里菜もぱっと笑顔を咲かせた。
「はい！」
「ところで、そうするにあたって、一つ、お願いをしても良いだろうか」
「え？」
「まず、『竜さん』はやめてくれ。『竜』でいい。あと、丁寧語もやめてくれ」
「……うん、分かった。じゃあ、あたしのことも『山口さん』じゃ

なくて『里菜』って呼んでね」
「分かった。……リナ……リーナ……」
竜は、その名前を噛み締めるように復唱した。微妙に母音を伸ばし気味の、クセのある発音が、なぜかやけに甘く懐かしく心に響いた。ただちょっとクセがあるだけだと思うけれど、まるで、ふたりだけの秘密の愛称のような気がして嬉しくなった。
「それじゃあ、とりあえず、ホタルの時期になったら、泊まりにおいで。ちゃんと、つっかい棒を用意しておくから」
この期に及んでまだ大真面目にそんなことを言うので、ホームセンターでメモとメジャーを手に真剣な顔で角材を選ぶ竜の姿が目に浮かんで、つい、くすっと笑ってしまった。
「つっかい棒は、いらないから」
言ってしまってから、この言葉がどういう意味に取られる可能性があるか、気が付いて焦った。
慌てて言い訳する。
「だって、ほら、棒だって安くないし！　私が泊まるときのためだけに、わざわざそんなもの買わなくても！　それに、竜さん――じゃない、竜は、あたしが『入らないで』って言えば、つっかい棒なんかなくても部屋に入らないでしょ？」
竜は、ふっと笑って、小さな子供にするように里菜の頭に大きな掌を載せた。
その泰然と穏やかな笑顔を見たら、一人でわたわた、あせあせしていたのがバカらしくなる。
「心配はいらない。棒なら、裏山から竹を切ってくるからタダだ」
里菜は一気に脱力した。
やっぱり、この人、変わってる――。
もし今度、ここに泊りに来て、竜から本当につっかい棒を渡されたら、ちょっと変わった御当地流のおもてなしの一種と思って、ありがたく使わせてもらうことにしよう……。

頭に載せられた竜の手が肩に降りてきて、里菜をそっと引き寄せた。里菜は竜の肩口に頭を凭せかけて、八重桜を見上げた。微かな風に薄紅の花びらが舞って、ふたりの上に降り注ぐ。

来年も、ここで、こうして、この人と、この桜を見られるといいな――。

エゴノキ平の晩(おそ)い春、どこかでまた、ウグイスが鳴いた。

――『エゴノキ平の春』・完――

エゴノキ平の春（完）（後書き）

連作短編集『里菜と竜兄ちゃん』シリーズ・エピソード１『エゴノキ平の春』完結です。
このシリーズは、実際の季節の歩みに合わせて、ゆっくりのんびり更新していこうと思います。
次の更新はバレンタインデー頃になります。
ＰＣの方で早く続きが読みたい方はサイトのほうへどうぞ。（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｃａｎｏｐｕｓｔｕｓｉｎ／ｉｌｆ－ｒｉｎａｒｙｕ．ｈｔｍ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5095s/

里菜と竜兄ちゃん

2011年4月26日09時10分発行